



地域の人々が必要とする医療とサービスを自信を持って提供することで、住民から頼りにされる、職員が誇れる病院に。充実したNST活動とともに、大学病院レベルの高度先進医療の充実を目指している。

患者目線の配慮が随所に

神奈川県大和市の医療法人新都市研究会「君津」会 南大和病院（藤井 真病院長・一般病床92床、回復期リハ病床40床）は、昭和56年（1981）、「周辺地域の方々への貢献を最優先とした医療」を目指し開院した。以来、徐々にその規模を大きくする一方、確実に地域に根ざす病院として発展してきたが、今もこの基本方針は変わっていない。現在の一日平均外来患者数は350人、平均病床稼働率は一般病床で94%だ。

同院は大通りから入った緩やかに開発が進む住宅街にある。近隣で最も大きな4階建ての白い建物はひととき目を引く。車寄せから風除け室を通過して

玄関を入ると受付ロビーがある。大病院にはないアットホームな雰囲気だ。左手奥が売店になっていて、ロビーの対面には仕切りを作り、顔を見ることのない待ち合いコーナーが設置されている。患者をはじめとする来院者への“かゆい所に手がとどく患者目線の配慮”という意味で、あれば当たり前に見えるコーナーの必要性は思いのほか大きいだろう。来院者に対する同院のスタンスがうかがい知れる。

一方、より骨太な地域医療を推進していく上で、この南大和病院を中心にグループ関連施設として、人工透析センター、南大和高座クリニック、南大和クリニック訪問看護ステーション、老人保健施設さくらぶらざ、デイサービスセンターを有している。これらの施設は、患者の利便性に応じてオープンした小田急江ノ島線高座渋谷駅前の南大和高座クリニ

ックを除き、ほぼ隣接している。

内 視鏡治療で大きな実績

同院は内科、外科、消化器内科・外科、耳鼻咽喉科、神経内科、リハビリ科を標榜する中規模病院でありながら最先端の医療技術を導入しつつ、地域連携室の機能を遺憾なく発揮し、患者の情報収集・整理と地域の他の医療機関との連携によって、当該地域医療に大きな役割を有する病院として進化し続けている。

特にがんの早期発見と治療に力を入れていて、内視鏡検査件数は年間3,000を超える。大学病院との緊密な連携によるバックアップ体制を取る内視鏡検査・治療、外科手術、化学療法の実績を積み上げてきており、特に胃がん・大腸がんを中心とした消化器がん手術は高い評価を得ている。20年以上前から取り組んできた内視鏡治療については、週刊朝日MOOK『いい病院 2013』でも早期がんの治療実績が紹介されている。なかでもESD（Endoscopic Submucosal Dissection = 内視鏡的粘膜下層剥離術）の症例数の多さが同院の特徴だ。

他には徒に間口を広げるのではなく、同院を特徴づける治療分野としてび治療、人工透析、リウマチ治療、リハビリテーションで専門性を磨き実績を上げてきた。

び治療では、痔核除去、PPH法、ジオン注、ゴム輪結索法の四つ全ての治療法によって対応する。人工透析は、患者の生活スタイルに合わせた3クール・プラス早朝体制で取り組み、管理栄養士による定期的な栄養指導も行う一方、送迎サービスもあるので車椅子の患者にも好評だ。リウマチ治療においては、早期診断・早期治療を重視し最新の治療法を駆使している。

リハビリテーションに関しては、同院の関連施設との連携はもとより、地域との連携によって厚みのある医療の提供に努める。また最近、足のリハビリにアシスト自転車の理屈と同様に、意志を持って動かそうとすると作動するリハビリロボットを採り入れた。本格的稼働はこれからだが、十分に使いこなすことができるようになれば、これもまた同院の目玉として機能することになるだろう。

これなどは藤井病院長が「10年後にはどのような医療に変化しているのかを意識し見据え、常に外の



病院玄関と無料送迎バス
バスのルートは5つ、診察券の提示でルート上であればどこでも乗車可能



一般外来に設置されているインフォメーションコーナー
ドクターごと、外来ごとに用意されている。

情報をリアルタイムで取り入れ、現場の医療に活かしていく必要があると思います」ということの一つの事例といえる。

さらに昨年4月より、耳鼻咽喉科が加わった。す

でにこの分野でも手術センターにおいてガイドラインに準じた扁桃腺摘出手術や内視鏡下副鼻腔手術を行っているが、花粉症のレーザー治療も始めた。ただし診察は、関連施設である南大和クリニックで行



一般外来に掲示されているポスター
分かりやすく洗練されたデザインで、来院者への最新情報提供・啓蒙ツールになっている。どんな病院なのか、何が出来るのかを知ってもらうことはとても重要。



ESDの症例数は年間50例を超え、食道のESDも行う。



本院2号館の透析センター(58床)に加え、高座渋谷駅前に昨年開設した南大和高座クリニックにも22床の透析ベッドを設置



NSTの中心になっている栄養部の充実ぶりは、日本で早期に活動を開始した本院ならではの。



ロボットスーツを今年導入



2年前から始めた市民講座は、たいへん好評

っている。こうした動きから同院では今後も標榜科が増えていく可能性を秘めているといえるが、方針はどこまでも地域の要請と期待に十分に答えられるだけの力量発揮が前提の開設を目指すということだ。

そして同院を紹介するにあたって忘れてならないのが、NSTの充実である。2001年に全国に先駆けて稼動を開始した施設のひとつで、今も進化を続け、NSTの介入実績はきわめて高く、治療効果の向上に貢献している。院内の多職種が患者を中心に連携するNSTの充実は、間違いなく同院の職員同士のつながりを密にしていることだろう。

さらに藤井病院長は、職員が生き甲斐と誇りを持って仕事に打ち込める環境づくりの必要性を説き、「スタッフが新たに試みたいことを出来るだけサポートできる体制、チーム医療の中で他職種のそれぞれの職能と顔が見えるように風通しをよくすること、スタッフそれぞれが自分自身の時間を大切にできて幸せで充実感が味わえるような職場環境を整えるといったことがその要因となるでしょう」と語る。藤井病院長は同院のホームページ上でも、アイデアを持っている若い力をどんどん活用し、“出る杭をのばす”ために、周囲とのバランスを取りながらの絶妙な手綱さばきで新しいアイデアをいろいろな部署に生かしていき、職員それぞれが外に誇れる病院を作っていくと“決意表明”している。また、大規模病院にはない特性を生かし、個々の職員が場面に応じて臨機応変に患者にとって最善の選択ができる能力と、結論を先延ばしにしないスピードある行動の重要性も述べている。

レベルの高い広報活動

ところで、同院は医療機能、サービスに関するパンフレットなどのインフォメーション・ツールが実に多い病院である。特に目立つのは廊下壁面に貼られた、同院の診療科や設備などの紹介を美しいデザインで仕上げた大判のポスターで、これらに目を通



病院から富士山を望む夕景

せば、この病院の概ねの特徴や取り組みが理解できるほどだ。

その内容もさることながらコピーや写真、それにデザイン性に優れているので、制作会社に依頼し作成していると思いきや、地域連携室において内部制作しているという。取材中、来院者がこれに見入っているのを何度か見かけたのだが、そもそもこうしたツールに興味を持たせるということはなかなか大変なことなのだ。

今日の病院経営は、最早、「座して待つ」スタイルというわけにはいなくなっている。高度な医療に加えて、きめ細かなプロモーション、広報、サービスの提供を推進していかなければならないのだが、同院においては立体的な展開がなされている。

それにこれによって、チーム医療における最も重要な“構成員”である患者とその家族の治療に対するモチベーションが高まり、まさに積極的な医療参加が促されることは十分に想像できる。その結果、同院の医療スタッフと設備も生きてくるというものだ。同院は、まだまだ発展の余地が大きな病院であることが随所に見てとれる。さらなる前進を期待したい。



藤井 真病院長